九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宇木汲田貝塚 : 1966・1984年発掘調査の再整理調査報告書

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

松本, 圭太
九州大学大学院人文科学研究院 : 学術研究員

高宮, 広土
鹿児島大学総合科学域総合研究学系 : 教授

上條, 信彦
弘前大学人文社会科学部 : 教授

他

https://hdl.handle.net/2324/4372000

出版情報 : 2021-03-25. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
バージョン :
権利関係 :

第11章　宇木汲田貝塚再整理調査の成果と課題

宮本一夫

１．はじめに

1966年の日仏合同調査ならびに1984年の科学研究費による調査によって出土した土器、石器、貝類、植物種子、炭化米、動物遺存体について、それぞれ報告してきた。貝塚層が細かく分層された1984年資料（田崎1986）はとりわけ重要であり、土壌サンプリングされたⅩa 層とⅨa 層から炭化米が出土しており、その他の貝類、植物種子、動物遺存体もこれらの層からフローテーションよって採集されたものがほとんどである。また、Ⅹa 層とⅨa 層から出土した炭化米４点の放射性炭素年代の較正年代値は紀元前９世紀後半を示しており（宮本2018）、Ⅹa 層から出土したアワ・キビの放射性炭素年代の較正年代値も紀元前９世紀を示している（米田ほか2019）。コメやアワ・キビといった１年生草本は、古木効果などを持つ木炭資料に比べ、実年代資料としては最も的確な年代を知ることができる資料である。それら７点の実年代値がほぼ同じであることは、Ⅹ層などの夜臼Ⅰ式の実年代が紀元前９～８世紀であると考えられた（宮本2018）。その場合、Ⅹ層、Ⅸ層などの実年代と土器型式との対応を明確にする必要がある。これに関しては、第４章で層別の土器型式との対応から検討したところである。その結果、Ⅹ層が夜臼Ⅰ式、Ⅸ層が夜臼Ⅱａ・Ⅱｂ式と考えられた。

２．層位と土器型式

同じ貝塚層であるⅩa 層の上部で堆積したⅨa 層には破砕された貝層が多く、さらに下部に堆積しているⅩa 層の方が、安定的に貝塚ブロックが検出されているところから（田崎1986）、上部のⅨa 層は下部のⅩa 層の貝層を巻き込みながら再堆積したものと考えた。この根拠の一つが、出土する炭化米が下部のⅩa 層では468点、上部のⅨa 層では147点と、Ⅹa 層の方が遙かに炭化米の出土量が多く（上條・小泉2019）、Ⅹa 層の方が安定的に炭化米を包含して堆積していることがあげられる。さらに、Ⅹa 層の炭化米２点とⅨa 層の炭化米２点の放射性炭素年代がほぼ紀元前９世紀後半に一致していた点も、上記の想定の根拠の大きな部分になっている（宮本2018）。また、第７章で示したように、貝塚層のⅩa 層とⅨa 層における貝種組成にほとんど差異がないことも、このような堆積環境の想定を可能にしていると考えられる。さらに、第４章で検討したように、Ⅸ層の内、貝層のⅨa 層の土器は夜臼Ⅰ式に限られる可能性があり、下層のⅩ層（Ⅹa・Ⅹb 層）が夜臼Ⅰ式であり、貝層のⅩa 層とⅨa 層は同一時期のものの可能性が高い。

さて、Ⅹa 層とⅨa 層の炭化米の年代が一致することに関して、それが資料上の問題から偶然に一致する結果ではないことを確かめるため、再度炭化米の年代測定を試みた。年代測定は前回と同様に（株）加速器分析研究所に依頼した。今回の年代測定に用いた資料は、F8-c 区の Xa-10-17層 No.1試料（上條・小泉2019図88）と F8-c・d？区の IXa-4-9層 No.1試料（上條・小泉2019図85）である。両試料はほぼ同じトレンチにおけるⅩa-10層とⅨa-4層という層位関係にあるが、この二つの層の間には別のⅩa-1層、Ⅹa-2層やⅩa-4層があり（図18）、両層は接していない。こうした層位関係での炭化米の較正年代値は図75や表18・19に示すように、ほぼ同じの紀元前９世紀後半から紀元前８世紀前葉を示しており、前回の４点の炭化米試料と同じ測定結果値を示している。Ⅹa 層の炭化米（IAAA-201348）

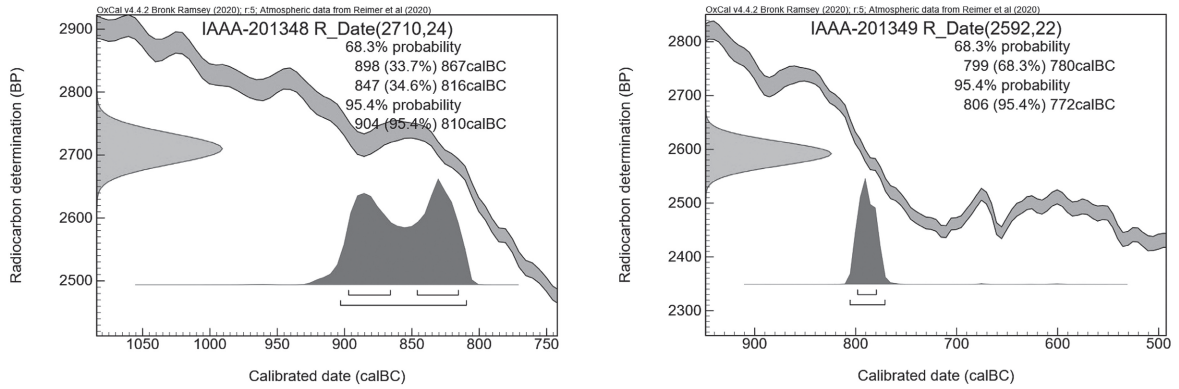


図75　宇木汲田出土炭化米の較正年代

表18　炭化米の放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ13C（‰）（AMS）	δ ^{13}C 補正あり	
						LibbyAge（yrBP）	pMC（%）
IAAA-201348	①	遺構：F8-c　層位：Xa-10-17層（no.1）	炭化米	AaA	-25.29±0.27	2,710±20	71.36±0.21
IAAA-201349	②	遺構：F8-c・d?　層位：IXa-4-9層（no.1）	炭化米	AaA	-25.87±0.20	2,590±20	72.42±0.21

表19　炭化米の放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ13C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-201348	2,720±20	71.32±0.21	2,710±24	898calBC-867calBC（33.7%） 847calBC-816calBC（34.6%）	904calBC-810calBC（95.4%）
IAAA-201349	2,610±20	72.29±0.20	2,592±22	799calBC-780calBC（68.3%）	806calBC-772calBC（95.4%）

が847calBC-816calBC（34.6%）、Ⅸa 層の炭化米（IAAA-201349）が799calBC-780calBC（68.3%）という測定結果（１σ）である。Xa 層の炭化米の較正年代値は前回のXa・Ⅸa 層４点のものと同じであるが、Ⅸa 層の炭化米の較正年代値は若干新しいものである。年代値としては連続するものであり、層位的な時期差というよりは同一層の年代幅を示していると考えられる。したがって、Xa 層の炭化米とⅨa 層の炭化米は同時期のものであり、本来Xa 層にあった炭化米が、Ⅸa 層の堆積時にXa 層を巻き込みながら再堆積したものであることが、改めて確かめられた。

第４章で、1984年の層位別に土器型式を検討したところ、Ⅺ層は江辻 SX-1段階、Ⅹ層は夜臼Ⅰ式、Ⅸ層は夜臼Ⅱa 式・夜臼Ⅱb 式、Ⅶ層が板付Ⅰ・Ⅱa 式であることが確認されている。Ⅺ層とⅩ層の遺物は少なく、Xa 層が純貝層に近い状態を示している。これに対し同じ貝層であるⅨa 層の遺物は少ないものの夜臼Ⅰ式に限定される可能性があり、Ⅸb 層では江辻 SX-1段階、夜臼Ⅰ式、夜臼Ⅱa 式、夜臼Ⅱb 式古段階、夜臼Ⅱb 式新段階を含んでいる。Ⅶ層では夜臼Ⅰ・Ⅱ式を若干含みながら、板付Ⅰ式と板付Ⅱa 式が主体である。貝塚層のⅩ・Ⅸ層は夜臼Ⅰ・Ⅱ式の夜臼式単純層であることが改めて確認できるとともに、Ⅶ層から板付式が新たに出現している。こうした層位別の土器型式の対応と、西日本における当該期の土器編年を対応させたのが表20である。炭化米やアワ・キビの存在からⅩ層段階の夜臼Ⅰ式には、確実にイネやアワ・キビといった穀物農耕が宇木汲田遺跡では始まっていたことを示している。すなわち、壺や板付祖型甕などの無文土器系統の土器や、石包丁などの大陸系磨製

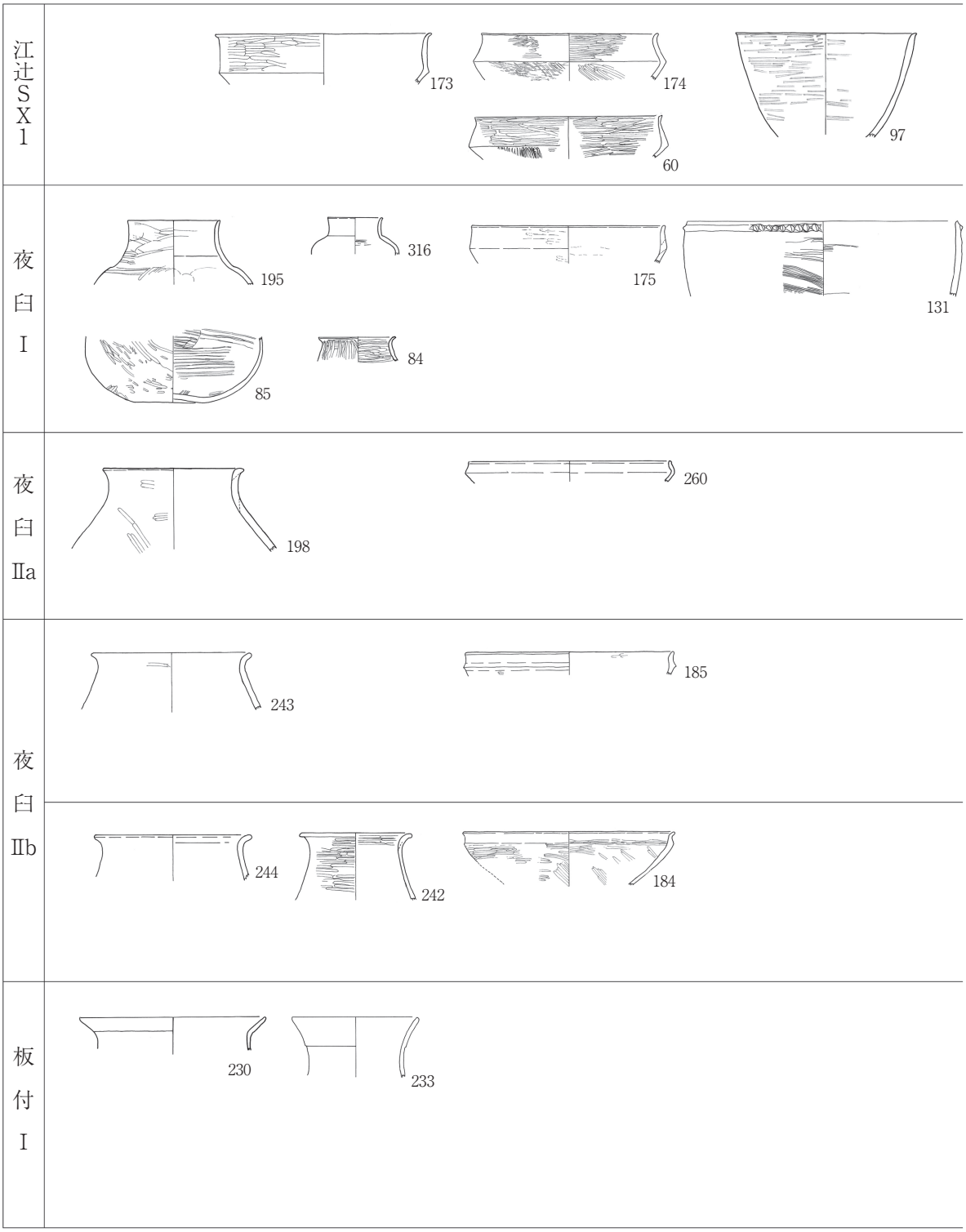
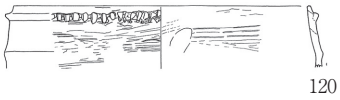
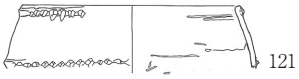


図76　宇木汲田遺跡の弥生移行期の土器編年（縮尺1/8）

115

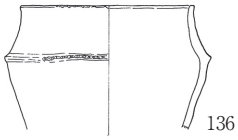

120

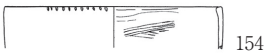

121

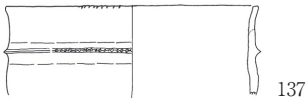
302
156

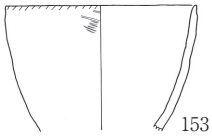
18

306


136


154


137


153

224

50

52

54

0
20 cm

表20　宇木汲田遺跡の層位別土器型式と西日本の土器編年との平行関係

	宇木汲田遺跡		福岡平野		東北部九州	瀬戸内	近畿
縄文晩期			黒川（中）		黒川（中）	谷尻	篠原
			黒川（新）		（長行）	前池	滋賀里Ⅳ（鬼塚H下層）
	Ⅺ層	江辻 SX-1	江辻 SX-1		（江辻 SX-1）		滋賀里Ⅳ（京大 BD33区）
弥生早期	Ⅹ層	夜臼Ⅰ	板付Ⅰ	夜臼Ⅰ	夜臼Ⅰ	（阿方）	口酒井期
	Ⅸ層	夜臼Ⅱａ	板付Ⅱ	夜臼Ⅱａ	夜臼Ⅱａ	津島岡大	舟橋
		夜臼Ⅱｂ古段階	板付Ⅲ	夜臼Ⅱｂ	夜臼Ⅱｂ	沢田	
弥生前期		夜臼Ⅱｂ新段階	板付Ⅳ	夜臼Ⅱｂ・板付Ⅰ	夜臼Ⅱｂ		
	Ⅶ層	板付Ⅰ	板付Ⅴ	板付Ⅰ	板付Ⅰ	（川津下樋）	長原

石器とともに、穀物農耕が夜臼Ⅰ式段階にもたらされていたのである。水稲農耕などの穀物農耕の始まりを以て弥生時代の始まりとすれば（佐原1975）、弥生時代の始まりは夜臼Ⅰ式段階とすることができるであろう。そして、その段階の弥生時代は唐津平野から福岡平野などの北部九州に限られている（宮本2017）。

刻目突帯文土器は、瀬戸内から九州東北部に広がって行き、福岡県北九州市長行遺跡や福岡県行橋市流松溝田遺跡 SX01などの九州東北部に達する（宮地2016）。この段階の福岡平野以西は、依然黒川式土器段階であった（宮本2011・2017）。続く江辻 SX-1段階で刻目突帯文土器が福岡平野東端までには確実に達している。この江辻 SX-1段階には壺は含まれず、朝鮮半島無文土器文化系統の土器はまだ出現していない段階である。江辻 SX-1段階の刻目突帯文土器深鉢は、福岡平野においても散見できるが未だ定着していない段階と判断される。宇木汲田貝塚の江辻 SX-1段階は浅鉢において確認できるが、深鉢においてはごくまれであり、やはり定着していない段階である。唐津平野では、菜畑９～12層出土土器のうち、口唇部から離れた位置に O 字形刻目が施された突帯を持つ山の寺式と型式認定された刻目突帯文土器が、この江辻 SX-1段階に属している（唐津市教育委員会1982）。また、糸島市曲り田遺跡で、曲り田（古）式とされた刻目突帯文土器にも、この江辻 SX-1段階に相当するものが認められる（橋口1980）。しかし、これらに壺や板付祖型甕が共伴するという層位的な一括資料は存在しない。江辻 SX-1という一括資料からすると、江辻 SX-1段階には壺や板付祖型甕あるいは大陸系磨製石器が存在せず、朝鮮半島無文土器文化の影響を受けていない。

一方、宇木汲田貝塚では、この江辻 SX-1段階に相当する刻目突帯文土器が認められず、このⅪ層段階は黒川式系統の深鉢が主体を占めていると考えられる。刻目突帯文土器深鉢が定着するのは、続くⅩ層の夜臼Ⅰ式段階である。この段階は壺やイネ・アワ・キビが出現する段階である。Ⅹ層には刻目突帯文土器深鉢は認められないが、Ⅸ層以上の層位に認められる刻目突帯文土器深鉢には型式学的にみて夜臼Ⅰ式に属する深鉢が存在している。上部層のⅨ層は、夜臼Ⅱ式段階に属する。この層は、型式学的に、夜臼Ⅱａ式、夜臼Ⅱｂ式古段階、夜臼Ⅱｂ式新段階に区分することができる。夜臼Ⅱｂ式は、２条突帯文土器深鉢の口縁部の突帯が消失して刻目のみが施される唐津平野の地域的な型式変化を示している（横山・藤尾1986）。また、夜臼Ⅱｂ式新段階は、福岡平野では板付Ⅰ式が出現している段階であるが（宮本2011・2017）、Ⅸ層には板付式土器が認められず、福岡平野の板付Ⅳ段階より一段階新しい段階のⅦ層段階から板付式土器が認められる（表20）。これは、板付式土器が福岡平野を中心に出現し、玄界灘西岸地域や瀬戸内・近畿の西日本に拡散していく現象（宮本2011・2017）を、層位的に証明したものである。

以上のような宇木汲田貝塚の1984年資料における層位的な型式変化から、夜臼Ⅰ式段階における朝鮮半島の無文土器文化系の壺・板付祖型甕と近畿・瀬戸内からの刻目突帯文土器の融合が唐津平野においてみられることが判明した。こうした土器型式の型式変化を系譜ごとに示し、様式的な土器変化

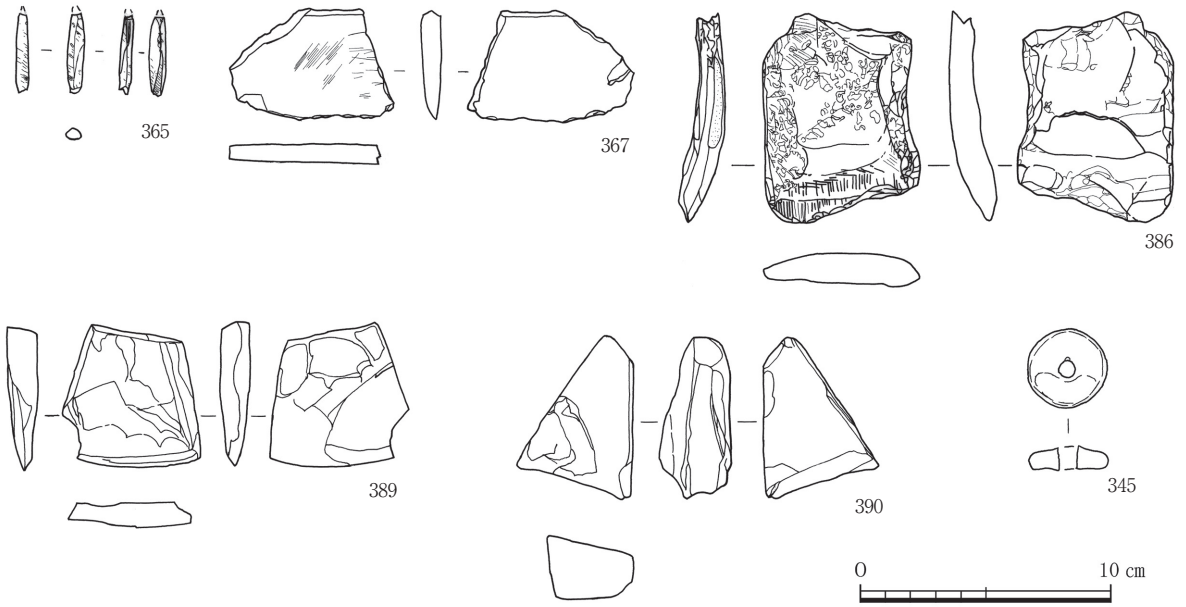


図77　宇木汲田貝塚出土弥生系石器・土製品

を示す必要がある。第４章の図53を基に、1984年のⅢ層資料や1966年の日仏合同調査資料を加えることにより、宇木汲田貝塚の江辻 SX-1段階から板付Ⅰ式までの型式変化を示して行くことにしよう（図76）。

江辻 SX-1段階は、宮地聡一郎のいう逆「く」の字形口縁浅鉢（浅鉢Ｃ類）の存在（図76－173・174・60）により確認できるが（宮地2004）、その時期に相当するであろう刻目突帯文土器深鉢が見当たらない。深鉢の大半は黒川式系の条痕地の深鉢であり、瀬戸内由来の刻目突帯文土器深鉢は菜畑遺跡などで点的に認められ、未だ充分に唐津平野には達していない段階と考えられる。また、壺などの無文土器系統の土器は出土していない。江辻 SX-1段階に相当するⅪ層では不定形刃器や黒曜石の剥片のみであり、縄文系の石器のみが出土している。

夜臼Ⅰ式のＸ層段階には、口唇からやや離れた位置に菱形刻目を施す刻目突帯文土器が主流になる段階である。刻目突帯文土器には屈曲形の２条刻目突帯文土器深鉢（図76－120・121）と寸胴形の１条刻目突帯文土器深鉢（同131）が認められる。逆「く」の字形口縁浅鉢（同175）は、前段階に比べ屈曲部から口縁部までの立ち上がりが短くなっている。縄文系の山形土偶（図78－349）も、この段階に刻目突帯文土器とともに近畿・瀬戸内から流入してきた可能性がある。九州では縄文後晩期には分銅形土偶が一般的であり（井上1993）、縄文晩期に近畿で山形土偶が再び出現するからである。さて、この段階のＸ層には朝鮮半島無文土器文化系の壺が出現している（図76－84・85）。壺は頸部が短く直線的に立ち上がるもので（同195・316）、壺の胴部も下膨れの形態的特徴を示している。壺の胴部内面には条痕調整も残るものもみられ（同85）、器形は無文土器文化系であるが、製作技術は縄文系の折衷的な様相を示すものもみられる。また、出土層位は不明であるが、316の夜臼Ⅰ式の壺（同316）にも内面に条痕調整が認められる。このような壺の内面に条痕調整が認められる土器は、曲り田遺跡などでも認められる（宮地2009）。一方で、確実に無文土器文化系の甕と考えられる口唇端部を刻む板付祖型甕（同302・156）も出現している。炭化米やアワ・キビもこのＸ層から出土しており、夜臼Ⅰ式段階から穀物農耕が伝来していることが明らかである。Ｘ層の石器には、石包丁（図77－367）などの大陸形磨製石器が伴い、確実に無文土器文化の影響を受けていることを知ることがで

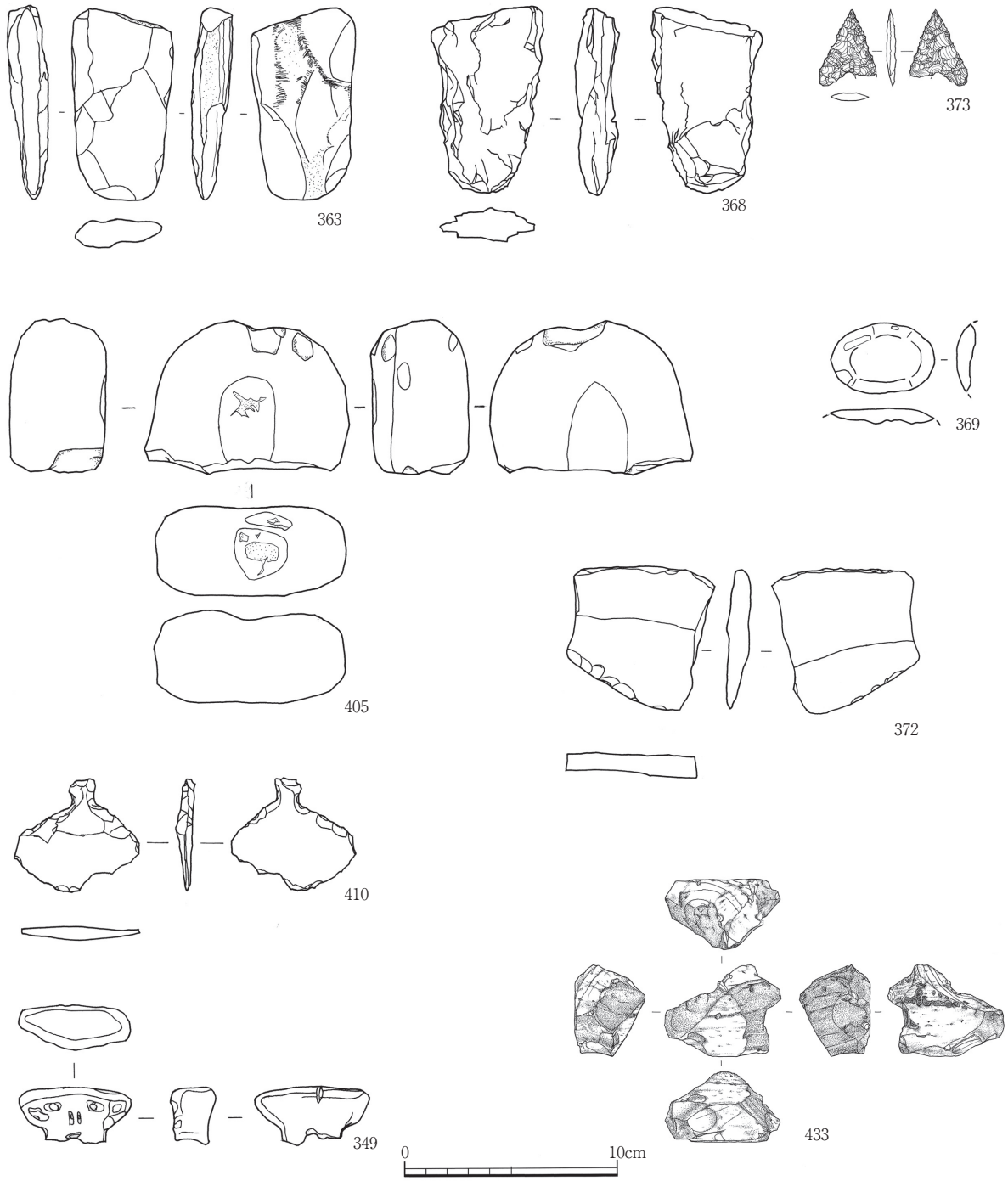


図78　宇木汲田貝塚出土縄文系石器・土製品

きる。一方で、打製石斧（図78－363・368）などの縄文系の石器も併存している。

夜臼Ⅱａ式は、口唇に接してＤ字形刻目が施された突帯が貼り付けられる特徴を持つ（図76－18）。この段階には砲弾形の１条突帯の刻目突帯文土器深鉢は認められず、屈曲形の２条刻目突帯文土器深鉢のみとなる。壺は斜めに内傾しながら立ち上がり、口端部でわずかに外反するものである（同198）。この段階の板付祖型甕（同306）は口端部の外面を刻むように在地的に変化していく（藤尾1991・2009）。浅鉢は逆「く」の字形口縁浅鉢の口縁屈曲部がさらに短くなっていくように変化していく（同260）。

夜臼Ⅱb式は、屈曲形の２条刻目突帯文土器深鉢の口縁部の突帯が消失し、Ｖ字形刻目のみが刻まれる刻目突帯文土器深鉢に変化する。夜臼Ⅱb式の刻目突帯文土器深鉢は古段階と新段階に区分することができる。古段階は夜臼Ⅱa式と同じように頸部が屈曲する深鉢（図76－136）であるが、新段階は屈曲部が消失して直立的な器形（同137）に変化している。このような変化は、福岡平野における口縁部に突帯を持つ２条刻目突帯文土器の夜臼Ⅱb式古段階から夜臼Ⅱb式新段階への変化に呼応している。これらの古段階と新段階に対応するように逆「く」の字形口縁浅鉢も型式変化していく（同185・184）。また、縄文系の条痕地の深鉢に刻目がみられるもの（同154・153）も、この段階の板付祖型甕の折衷タイプと考えることができるであろう。

夜臼Ⅱb式新段階以降に、福岡平野より一段階遅れる形で、Ⅶ層に板付Ⅰ式が出現する。口縁端部が若干外反気味で口端部が刻まれる甕（図76－224・50・52・54）と、頸部が内傾して立ち上がり口縁部が外反し肥厚した口縁部をもつ壺（同230・233）に特徴が認められる。これら板付Ⅰ式は福岡平野を中心に出現したのであり（宮本2011・2017）、一段階遅れる形で西は唐津平野へ、東は瀬戸内・近畿へと広がっていったことが確認できる。特に、前者は唐津平野と福岡平野の土器変遷の平行関係とともに、宇木汲田貝塚の層位的な土器型式の出現関係によって証明されたのである。

３．弥生時代開始期の生業復元

炭化米の出土状況や貝類の組成比などから、貝塚の内容物はＸ層の夜臼Ⅰ式段階のものであることが示された。したがって、貝塚から得られる生業の情報は夜臼Ⅰ式段階のものということができるであろう。第９章の植物遺存体の分析でも明らかなように、Ｘ層には大量のイネとともにアワ・キビが少量発見されている。この夜臼Ⅰ式段階において、稲作農耕とともに、アワ・キビなどの畑作も行われていた可能性が高い。それは、朝鮮半島無文土器社会の生業のあり方と同じものである。そして、その実年代は炭化米の放射性炭年代が紀元前９世紀後半を中心とするものであり（宮本2018）、アワ・キビが紀元前９世紀代のものであった（米田ほか2019）。これらは、日本列島最古の栽培穀物ということができ、紀元前９世紀には唐津平野では穀物農耕が始まっていたことを示すものである。また、この段階のイネは比較的小型であるとともに大きさの変異が大きく（上條・小泉2019）、初期的なイネの形態を示している（上條2018）。さらにDNA分析によれば、これらのイネはインディカか熱帯ジャポニカにおいて認められるDNA領域を有していた（田中2019）。また、唐津平野の菜畑遺跡の同じく夜臼式段階の炭化米のDNA分析では、同じように熱帯ジャポニカという分析結果が示されている（佐藤1992）。弥生時代前期の板付Ⅰ・Ⅱa式の有田遺跡の炭化米のDNA分析では、それらは温帯ジャポニカであった（田中2019）。これらは丸型の中粒の粒径を示し、弥生前期以降の主流のコメになって行く（上條2018）。夜臼Ⅰ式という初期に唐津平野に流入したコメは熱帯ジャポニカであり、夜臼Ⅱ式以降に福岡平野を中心に流入した稲が温帯ジャポニカであった（宮本2019）。これらの温帯ジャポニカを有する洛東江下流域の無文土器文化が、板付式土器を生み出した文化の母体であると考えられる（宮本2017）。

一方、夜臼Ⅰ式段階での南江流域などの朝鮮半島無文土器文化から唐津平野への文化波及により（宮本2017）、支石墓などの墓制とともに穀物農耕と石包丁などの大陸系磨製石器さらには壺や板付祖型甕が生まれている。板付祖型甕や支石墓などの変化をみると、夜臼Ⅰ式段階での無文土器文化の波及の後、唐津平野では在地的な変化を示し、さらなる文化波及を受けた形跡は認められない。また、夜臼Ⅰ式のＸ層以降には図77に示すような大陸系磨製石器が出現している。石包丁以外に、扁平片刃

石斧や柱状片刃石斧といった木器や木製品製作のための加工具がある。あるいは、土製円盤形紡錘車も、無文土器文化の影響の下に出現したものである。なお、伐採斧である磨製石斧に関しては、縄文系の石斧である（下條1986）。

また、Ｘ層では堅果類も出土している。図78に示すように、打製石斧や叩き石・磨石などは縄文系の石器である。特に叩き石（図78－405）や磨石（同369）は、堅果類を加工する縄文時代の伝統的な石器であり、夜臼Ⅰ式段階には縄文時代以来の堅果類も食料として利用されていたと考えられる。貝塚層には、魚類やイノシシ・シカなどの哺乳動物などの動物遺存体も認められ、基本的に縄文時代貝塚と同じ様相を示している。貝類では、マガキ・オキシジミ・カワアイガイ・イボウミニナなどの内湾潮間帯の貝種が最も多く、次いでヤマトシジミやカワニナなどの淡水あるいは汽水域の貝類が採取されている。それらの貝類は、遺跡近くの内湾域から宇木川河口域で採集されたものである。このように、貝塚内部の自然遺物は、穀物農耕が始まった夜臼Ⅰ式段階でも依然として縄文的な狩猟採集が生業の基盤をなしていたことを示している。

以上のような貝塚層の自然遺物や石器の分析からは、狩猟採集という縄文の生業活動と、穀物農耕という無文土器社会の生業が複合された様相が明らかとなった。夜臼Ⅰ式という初期農耕の始まりの段階は、土器などの組成にもみられるように縄文系の生業と朝鮮半島無文土器文化的な生業が混合した段階であったということができる。一方、同じ唐津平野の菜畑遺跡の水田址は、弥生前期の板付式段階のものと考えられている（山崎1987）。また、宇木汲田遺跡に隣接する梅白遺跡も夜臼Ⅰ式段階から始まる遺跡であるが、夜臼単純層には水田遺構は発見されておらず、弥生前期以降に畦畔水田が発見されている（佐賀県教育委員会2003）。宇木汲田遺跡の水稲農耕も畦畔水田という進んだ灌漑農耕段階ではなく、天水田のような初期的農耕段階であったと想定できる。したがって、自然変異に強い熱帯ジャポニカが選ばれたのではないかと考えられる。福岡平野では水田址など灌漑農耕によって温帯ジャポニカが栽培され、生産力が高く、より農耕に依存した社会であった可能性がある（宮本2019）。

４．まとめ

宇木汲田貝塚の1966年日仏合同調査資料や1984年調査資料を再整理することにより、以下の点が明らかとなった。特に、1984年調査の層位的な資料は土器型式の認定や土器型式変化、福岡平野との地域間関係などを時空的に明らかにすることができた。

１）Ⅺ層は江辻 SX-1段階であり、この段階から遺跡が始まる。この段階には、朝鮮半島無文土器文化の影響がないとともに、瀬戸内から東北部九州を介して広がっていく刻目突帯文土器文化の広がりも明確ではなく、黒川式的土器様式が依然として主体である。

２）Ⅸ層の貝層は、Ｘ層の貝層を巻き込みながら再堆積したものである。Ｘ層は夜臼Ⅰ式、Ⅸ層は夜臼Ⅱ式の文化層である。

３）Ｘ層の夜臼Ⅰ式段階には、刻目突帯文土器文化の広がりが明確となり、この段階に山形土偶も近畿・瀬戸内を経て広がってきている。

４）同じＸ層の夜臼Ⅰ式段階には、朝鮮半島無文土器文化の影響を受けて壺や板付祖型甕が出現している。但し、壺には胴部内面に条痕調整が残るなど縄文的な技術要素が認められるものも存在している。また、石包丁などの大陸系磨製石器もこの段階から出現している。

５）このＸ層には、多量の炭化米とともにアワ・キビが少量出土しており、夜臼Ⅰ式段階から唐津平野では稲作農耕とともにアワ・キビ栽培が始まり、穀物農耕が始まっている。

6）Xa・Ⅸa層の炭化米とアワ・キビの放射性炭素年代は紀元前９世紀～８世紀のものであり、夜臼Ⅰ式は紀元前９～８世紀にあたり、この年代を弥生の始まりとすることができる。

7）一方、X層の貝層には堅果類も出土しており、打製石斧や叩き石・磨石などの存在からも、堅果類の加工などの縄文的生業も行われていた。

8）X・Ⅸ層の貝層からは、魚類やイノシシ・シカなどの哺乳類を含む動物遺存体が出土しており、縄文的な狩猟活動も行われていた。

9）X・Ⅸ層の貝塚の貝種は内湾潮間帯が主体で、この他、淡水・汽水域の貝類がこれに続いて認められる。これらは遺跡近くの内湾域や河口域で採集されたものである。

10）このように、夜臼Ⅰ式の初期農耕段階は、縄文的生業である狩猟採集活動とともに、イネやアワ・キビの穀物農耕を行う複合的な様相が認められる。それは季節的な狩猟採集活動に、穀物農耕が組み込まれたものである。

11）唐津平野の夜臼Ⅰ式の炭化米は熱帯ジャポニカからなり、初源的なイネである。これは天水田などの本格的な灌漑農耕導入以前の粗放的農耕による可能性があり、そのため環境変異に強い熱帯ジャポニカが導入された可能性が高い。

12）Ⅸ層は夜臼Ⅱ式段階のものである。夜臼Ⅱb式古段階の内面土器付着炭化物の実年代は紀元前７～６世紀であり（宮本2018）、夜臼Ⅱ式も紀元前７～６世紀頃と考えられる。

13）この夜臼Ⅱ式段階には、板付祖型甕が在地的に変化する。さらに夜臼Ⅱb式の刻目突帯文土器も唐津平野内で在地的に変化している。このことは、この夜臼Ⅱ式時期には大陸から新たな文化的波及もないとともに、福岡平野などの外部との接触もなく、内的に孤立した状態を示している。

14）板付Ⅰ式はⅦ層から出現する。Ⅸ層には夜臼Ⅱb式新段階も含まれるが、この段階には福岡平野では既に板付Ⅰ式が成立している。このことは、福岡平野に成立した板付Ⅰ式が、一段階遅れて唐津平野に広がっていることを示している。

15）Ⅶ層は板付Ⅰb式から板付Ⅱa式の土器も含まれている。この段階は有田遺跡出土炭化米の年代から紀元前６～５世紀にあたる（宮本2018）。この時期が、板付式土器（遠賀川式土器）文化が唐津平野を含む玄界灘西岸地域や瀬戸内・近畿に広がっていく段階である。

参考文献

井上繭子1993「西日本の土偶」『古文化談叢』第29集、21-53頁

上條信彦2018「水稲農耕定着段階における九州出土米の粒径質の変異」『九州考古学』第94集、23-43頁

上條信彦・小泉翔太2019「宇木汲田貝塚出土米の粒形質分析」『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』九州大学人文科学研究院、124-144頁

唐津市教育委員会1982『菜畑遺跡』（唐津市文化財調査報告第５集）

佐賀県教育委員会2003『梅白遺跡－西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（２）』（佐賀県埋蔵文化財調査報告書第154集）

佐藤洋一郎1992『稲のきた道』裳華房

佐原真1975「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史』1、岩波書店、113-182頁

下條信行 1986「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開―宇木汲田貝塚一九八四年度出土石器の報告を兼ねて―」『九州文化史研究所紀要』31、103-140頁

田崎博之1986「唐津市宇木汲田遺跡における1984年度の発掘調査」『九州文化史研究所紀要』第31号、1-58頁

田中克典2019「宇木汲田遺跡および有田遺跡から出土したイネ種子のDNA分析に基づく弥生早期の北九州に伝播したイネタイプの検討」『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』九州大学人文科学研究院、145-159頁

橋口達也1980「日本における稲作の開始と発展」『石崎曲り田遺跡－Ⅲ－』（今宿バイパス完形埋蔵文化財調査報告　第11集）5-103頁

藤尾慎一郎1991「水稲農耕と突帯文土器」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ　日本における初期弥生文化の成立』187-270頁
藤尾慎一郎2009「板付Ⅰ式土器を創ろうとした村、創れた村、創れなかった村」『弥生時代の考古学２　弥生文化誕生』同成社、105-113頁
宮地聡一郎2004「刻目突帯文土器の成立（上）（下）」『考古学雑誌』第88巻第１号・第２号、1-32・38-52頁
宮地聡一郎2007「西からの視点「逆「く」字形浅鉢の成立と展開」『第８回関西縄文文化研究会　関西の突帯文土器発表要旨集』127-134頁
宮地聡一郎2008「凸帯文系土器（九州地方）」『小林達雄先生古稀記念企画　総覧　縄文土器』弘・プロモーション、806-813頁
宮地聡一郎2009「刻目突帯文土器と無文土器系土器－異系統土器共存の実態－」『古代文化』第61巻第２号、258-268頁
宮地聡一郎2016「流末溝田遺跡の縄文晩期土器－九州地方周防灘沿岸部における刻目突帯文土器出現期の様相－」『九州歴史資料館研究論集』41、15-23頁
宮本一夫2011「板付遺跡・有田遺跡からみた弥生の始まり」『新修　福岡市史　資料編考古３　遺物からみた福岡の歴史』3-89頁
宮本一夫2017『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社
宮本一夫2018「弥生時代開始期の実年代再論」『考古学雑誌』第100巻第２号、1-27頁
宮本一夫2019「東北アジア初期農耕化４段階説と稲作農耕の諸問題」『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』九州大学人文科学研究院、199-211頁
山崎純男1987「北部九州における初期水田－開田地の選択と水田構造の検討－」『九州文化史研究所紀要』第32号、127-186頁
横山浩一・藤尾慎一郎1986「唐津市宇木汲田遺跡における1984年度調査出土の土器について」『九州文化史研究所紀要』第31号、59-101頁
米田穣・尾嵜大真・大森貴之2019「宇木汲田貝塚から出土した雑穀の炭化顕果における放射性炭素年代」『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』九州大学人文科学研究院、160-163頁